

水の文字はいふまでもなく支那の史籍から取つたものであるが、土人の稱呼が其の文字を借りて寫されるやうなものであつたか、どうか。三國史記には「川」の國語を「貫」の字で寫して居るから「涇」と幾分か似ては居るが、漢江を阿利水（好太王碑）といつたやうに臨津江にも禮成江にも特殊な固有名詞があつたこと、思はれるから、涇水は文字ばかりでなく、名稱其のものまでも支那人から借りて來たのであらう。換言すれば、實際の稱呼に無關係な名を支那の史籍から見付け出して、机の上でのみ用ゐたのであらう。特にそれが百濟の方にのみ主として用ゐられてゐるところを見ると、百濟人が半島の北境にある大河の名として知られてゐる涇水の稱を借りて、百濟の北方にある河水の名に用ゐ、恰も百濟が半島の全部を有つて居るかの如く装はうとしたのではあるまいか。百濟紀、新羅紀などの全體の書き方や、其の時代の韓人の

思想から考へて、かう見た方が事實にあつて居ると思ふ。果してさうならば、之れが臨津江だが、禮成江だとか詮索するものも、少しく愚なやうであるが、傳説作者の腦裡には、やはり、どれか一つの河があつて、それに涇水の名をあてたのであらうから、比較的大きい點からいつても、「涇帶二水」と連稱せられた點からいつても、臨津江とした方がよさうに考へる。本文の涇水とは無關係の問題であるか、同じ名稱のこともあり、「本國境內蓋有三涇水（東國輿地勝覽）」などいふ説もあるから、附記して置く。（完）

新 波斯教殘經に就て

羽 田 亨

有唐一代の盛世に當り漢民族か其の勢力を四方に發展するや、遐邇悉く來り貢し、一時長安の首都は

亞細亞の中府なるが如き觀を呈するに至れり。されば四方の文化亦翕然として支那に集り互に其光彩を競ひしが如しと雖、其後兵亂頻りに起りて、古記空しく湮滅に歸し、千載の後其の當時を偲ぶものをして、徒らに茫漠の嘆に堪えざらしむ。去歲敦煌莫高の石室より英、佛の學者が齎らし去りたる多くの記録は、思ふに稍此間の消息を解くに足るものあるべし、早く之が精細なる研究の發表を見て、暗府に炬火の光明を得んとするもの吾人の切望して止まざる所なりとす。一度英に輸せられ、二度佛に送られ、然も尙剩す所の數千卷は敦煌石室の遺書として今や北京學部の有に歸し、其の目錄の如きは既に京都文科大學教授諸氏によりて發表せられたり。頃日碩學羅振玉氏此中より殘經一卷を撰出して、名けて波斯教殘經となし、之を國學叢刊第二冊に收めて世に公けにせらる。余幸に其の一本を贈らる。披きて其の序を閲するに曰く、

殘寫經一卷、前半已缺佚、後半完好、然無後題、吾友臨川李君證剛、以其中專闡明明暗之旨、證以景教三威蒙度讀有合處、遂定爲景教經典、然考、火祇摩厄與景教頗類似、未易分別、且皆由波斯流入中土、故姑顏之曰波斯教經、以俟當世之宗教學者考證焉、

と、則ち波斯教經の名の與へられたる所以を知るべし。余もとより宗教學に於て知る所なし、されど殘經を通讀すれば、明らかにこれトニ教 (Manichæism) 經典にして、決して彼の景教と混同すべきに非ず。則ち此の一篇を草して以て羅氏の厚意に答へ、一方之を學界の珍として同學の士の一餐に供せんとす。然も其の全文は同誌十四枚の長さに亘り、今悉く之を掲出し得べきに非ず、只其の數句を抽出して、以て此經の性質を定め、更に此經の示す所によりて、東方のマニ教に關する諸學者の説を少しく補ふを以て止まんとす。

一、教義上より見たる殘經の性質

此經は羅氏の序文にも見るが如く後の一部のみ完全に残せるものにして、明使なるものが阿駄なるもの、間に答へて、其の疑義を解かなが爲に、世界創造の所以を説くに始まり、次でまた諸宗徒に明暗二力の争闘の有様を説き、轉じて此宗教の上より見たる完全圓滿なる人格を説示するに終れり。その第四行以下に曰く、

余時明使告阿駄言、善哉善哉、汝爲利益無量衆生、能問如此甚深祕義、汝今即是一切世間盲迷衆生大善知識、我當爲汝分別解說、令汝疑網永斷無餘、汝等當知、即此世界未立以前、淨風善母二光明使、入於暗坑无明境界、拔擢驍健常月

大智甲五分明身、策持昇進、令出五坑、

其五類魔、黏五明身、如蠅著蜜、如鳥被網、如魚吞鈎、以是義故、淨風明使以五類魔及五明身二力和合、造成世界十天八地、云々

と、これ此宗教に於て世界十天八地の生成を説けるものにして、暗坑無明界に陥りし五個の明身と、及び之に附纏せし五個の惡魔との和合を以て、淨風明使なるものが造成せりと成せるものなり。其の明といひ、暗といひ、而して明暗の二力が世界を造成せりとといひ、更に明暗各五個の數を數ふるに至りては、既に吾人をして此教義がマニ教なるべきを思はしむるに足る。今試みに亞刺比亞のアブル、ファラーヂュ (Aboul Farage) が、其の著フイーリスト (Fihrist al-'ulum) の中に説けるマニ教の世界生成説と之を對比すべし。

因みに云ふ、マニ教の教義系統を説けるもの、西紀十世紀末にアブル、ファラーヂュが此書に記せるより以前既に多し、されど彼等は皆基督教徒の著者にして、此の教を以て基督教より發生せしものとせる偏見は、屢々捏造の記述、偏頗の論議を取てせしむるものあり、されば近時の學者多くは之

を取らずして、遙かに後世のアブル、フアラージュに據れり、これその記載の公平なると、史料の根本的なることに信頼すればなり、余が特に此著者に據るものも亦此故に外ならず。

『マニ説て曰く、世の初めは明暗二力の作る處なり、兩者互ひに相別れて存し、共に廣大無邊なり、神は明界樂園の王にして、溫和(Sanftmuth)智識(Wis-sen)悟性(Verstand)秘密(Gelheimniss)聰明(Einsicht)及び愛(Liebe)信(Glauben)忠實(Treue)寬恕(Edel-sinn)賢明(Weisheit)なる各五個の從屬(Glieder)を有せり、此明神と共に空間と地とありて亦各五個の從屬を有す、前者に屬するものは、溫和、知識、悟性、秘密、聰明にして後者は氣(Leise Luftauch)風(Wind)光(Licht)水(Wasser)及び火(Feuer)なり、明に對して暗あり、其從屬は霧(Nebel)猛火(Brand)暴風(Gilwind)毒(Gift)及び暗黒(Finsterniss)なり
 ……………(暗界の惡魔は常に上方明界に向ひて害

惡を加へんとす)、神は惡魔を征せんとして、其五從屬、十二行(Element)及び一原人(Geschöpf=Urmensch)に命じて暗と戰はしむ、原人乃ち氣、風、光、水、火を以て武装し、……………暗界に突下せり、惡魔も之を見て其五從屬を以て應戰し、終に明軍に克ちて之を幽閉せり、明神更に軍を遣はして之を征し、地獄に陥没せる原人を惡魔の中より救出せり、先きに魔軍の克つや、其五魔は各々五明に配して混一し、深く那落到沈みしが、原人は一天使に命じて此混淆せるものを浮出せしめ、明神は更に又他の天使をして、此等の混合體を以て世界を形成し、以て暗より明を離出せしめんとせり、天使乃ち茲に十天八地(Höhen Himmel acht Erde)を作る云々と(Flügel Mann; seine Lehre und seine Schriften. s. 86-9)此説く處を以て前記殘教に見ゆる世界創造説に對比すれば、容易に兩者の同一宗教の所説なるを認め得べく、而して他の諸宗教との間にかゝる著しき類似を求め得べき

に非るを知るべし、蓋し經に謂ふ所の五明身とは前記驍健、常勝(?)○○、○大、智甲を指せども、之れ後に述ぶる所によりて知るが如く、清淨氣、妙風、明力、妙水、妙火の五者の別稱にして、フイーリストに説ける地の五徒屬及び、先きにスタイン氏が敦煌より、又た露要亞の探検隊が吐魯番より得たる畏吾兒語のマニ教の祈禱文なるクアスツァニント(Khuastunant)中に見ゆる五明とも、其記述の順序に至る迄相一致するものなるを知るべし、即ち

殘經

Fhrst.

Kunstunant.

- | | | |
|-------|---------------|------------|
| 一、清淨氣 | 1. Lufthauch. | 1. Zephyr. |
| 二、妙風 | 2. Wind. | 2. Wind. |
| 三、明力 | 3. Licht. | 3. Light. |
| 四、妙水 | 4. Wasser. | 4. Water. |
| 五、妙火 | 5. Feuer. | 5. Fire. |

(クアスツァニフトのスタイン氏の得たるものは、ルコック氏之を英譯して、Journal of the Royal Asiatic Society 1911.に載せ、魯西亞のものはマロフ氏之を譯して、千九百九年 "Onstunant, das Bussgebet der Manichäer," の

名によりて波得隆より發行せり)

五類の魔の名は殘經中に明らかには數へざれど、然も亦猛火、毒、烟霧、暗黒の四者は惡魔の力能として諸所に記されたり、而して此等の五明、五魔を以て此世界を作れりと成すものは、實にマニ教の精神とする所にして、是によりて世界の明暗兩者の争闘が永久に斷えざるを説くものなりとす、殘經が此點に於てフイーリストの記する所と一致すること、恰かも符節を合するが如くなるは此經の性質を定むるに於て極めて重要なことなりとす、只だ殘經には何が故に此等の五明身が暗坑無明境界に存在せしやに就ては記する所なけれども、必ず之れ先きに魔軍との戰に敗れて暗坑中に陥没するに至りたる事情を省略せしに止まるなるべし。

更に又た殘經四枚右に記する所によれば、惠明使なるものが其五體より五施を化出したりとして、憐愍、誠信、具足、忍辱、智惠の五明を擧げたり、之

れ亦たフィリストに記せる明神の五從屬に比するを得べし、即ち

憐 愍 〓 Liebe.

誠 信 〓 Glauben.

具 足 〓 Thene. (?)

忍 辱 〓 Edelsinn.

智 惠 〓 Weisheit.

以上殘經に説ける世界生成説が、マニ教の説く所と一致するものなるを述べたり、而して此の如くにして明暗の兩要素を以て形成せられたる此世界には、兩者の争絶えずとし、之に倫理的エシカスの説明を加へて以て人をして明神に依頼し暗魔を避くべしとするもの、即ちマニ教義なりとす、殘經には則ち此の如くにして生成せられたる世界に、常に明暗兩者の戦の繰り返さるゝ有様を説けり、今其一節を摘録すれば、

其彼淨風、取五類魔、於十三種光明淨體、囚禁

束縛、不令自在、魔見是已、起貪毒心、以五明性、禁於空身、爲小世界、亦以十三無明暗力、囚固束縛、不令自在、其彼貪魔、以清淨氣、禁於骨城、安置暗相、栽蔀死樹、又以妙風、禁於筋城、安置暗心、栽蔀死樹、又以明力、禁於脉城、安置暗思、栽蔀死樹、又以妙水、禁於空城、安置暗思、栽蔀死樹、貪魔以是五毒死樹、栽五種破壞地中、每令惑亂光明本性、抽彼客性、變成毒藥、云

と、而して暗慈に克ちて明更に之を従かへ、變轉盡さず。

余は教義の上より殘經を見て之をマニ教典と定むるには、以上の一節を以て既に足れりと信ず、もとより此教義の特徴と認むべきものは、經中只だ此一例に止まらず、頻々として之を擧げ得べしと雖、今一々列擧するの要なかるべし。

以上既に此經典の性質を定め得たりとすれば、余

は先きに見たる「余時明使告阿駄」と云へる明使、阿駄なるもの何なるべしやに就て一言せざる可らず。マニに知名の使徒三人あり、Adda(また Adas: Baddas 等と記す) Thomas, Hermas とす、就中 Adda は、東方スキチア地方の教化に従事せし人として知らる。(Függer. s. 6. 12. 15.) 余は經の阿駄なるものを以て、此使徒 Adda に當て、従がつて明使を以てマニを言へるものと見んとす、もとより經に明使として記さるゝものは、其の意味頗ぶる廣汎にして、所によりて指す所同一ならずと雖、既に述べたるが如く、此節は神の世界創造に就て語れるものにして、之を明神の使と稱するマニが、其の門徒にして東方の教化を司りしアッダに説きたるものとして見るは、極めて妥當のことなるべければなり。

二、殘經の價值 (其の一部の轉載)

西紀二百七十七年の頃、教祖マニが其の教の爲に一身を犠牲に供するや、教徒の多くは東オクサス河

を越えて中亞の地に逃れ、サッサン朝波斯の滅亡に際して一たび歸國せしも、又た十世紀の中葉に於てマホメット教徒の迫害を蒙りて、再び東方に移りしが此間にも其宗教は支那回紇等を始め東方諸民族の間に宣布せられ、決して衰亡の状態には陥らざりしが如し、然れども其經典は東西ともに今日に存するもの極めて少く、従がつて之が研究は實に至難の事業とせられたる所なり、近時支那新疆省の諸地に諸國の學術的探檢の行はるゝや、茲に初めて東方に行はれしマニ經典の發見せらるゝものありて、假今其の多くが斷片にして、而して今日既に死語に屬せる諸國語を以て記するものなりとは雖、之によりて漸次此の宗教の性質が闡明せらるゝに至りしは、實に學界の慶事なりとす。此の如くにして得られたる經典よりして考がふれば、マニ教は少くとも東方諸國に行はれたる摩尼教が、佛教との關係極めて深きものなりしを知るべく、經典中に佛典を其の儘挿入せ

るが如き例も少きに非ず、此の如きは獨り西人の研究の結果によりて知り得べきのみならず、現に今余輩が研究中に屬せる、新疆出土の畏吾兒語の此經典中にも明らかに佛典を引用せるものあり、兩者の關係は曾て想像せられしよりも遙かに親密のものなるが如し、此經中にも次に記するが如く「化佛」、「如來」等の文字の使用せらるゝものあり、彼の開元二十年の勅に「末尼本是邪見、妄稱佛教」、(佛祖統紀第五十四)と見ゆるものは、能く其の實狀を寫せるものなるが如し。而して支那に於る此宗教の生命は、ほと回紇民族の唐に於ける勢力と相伴ひたるものにして、從がつて僅かに百年内外に過ぎざるが如きも、然も其の間大歷年間には荆、揚、洪、越等の諸州に摩尼寺の建設あり、(佛祖統紀第三十、第五十四)元和二年にも太原府、河南府等に寺の建立せらるゝありて、(舊唐書十四卷)其の教線は北方諸州は勿論、南方も今日の湖北、江蘇、廣西、浙江等に迄及びしものなれば、其經典の翻譯せられしも

の決して少からざりしなるべく、彼の宋の良渚が記する處に據るも、佛佛吐戀師、佛說啼淚、大小明王出世經、開元括地變文、齋天論、五來子曲等の經の存せしを知る可く、(佛祖統紀第二十九)此殘經中にも應輪經、寧萬經等の名見え、殊に又た經典の轉寫は佛敎に於ると等しくマニ敎にても之を獎勵したるものなること、此經に見ゆるが如くなれば、(後)唐代には之が存在決して少々には非りしならんも、今日もとより其の一部の存殘をも知る可らず。而して今初めて敦煌の石窟より、僅かに此缺佚の一篇と、先年既に發表せられたるペイオ(Pelliot)氏の得たる斷片一葉(敦煌遺書摩尼教殘卷)とを得るに至りしに過ぎざるなり。而して漢譯のマニ敎經典としては勿論、トルコ語ツグド語等に翻譯せられたるものにして、今日に發見せられたるものゝ中にも、未だ此殘經の如く其内容の貴重にして且つ長篇に亘るものありしを聞かず、其の一方の精細なる研究は之を他日の發表に期せんも、と

にかく今余は之を推奨して以て東方摩尼教の至寶と稱せんとす。夫れ然り則ち先きに見たる世界創造說等の外に、此宗教々義の上より最も重要なりと認むべき一節を茲に轉出して、未だ殘經を見ざる人にすゝむるは決して無用の業に非るべし。茲に轉載する所は惠明相なる名によりて、大王、智惠、常勝、歡喜、勲修、平等、信心、忍辱、直意、功德、齊心一等、内外俱明の所謂十二光明時なるものを擧げ、其の一々の光明に就きて各五個の記驗の存するを説き、能く此光明を把持するものは生死を出離し淨界に至るべきを説けるものなりとす。則ち

若電那勿具足十二光明時者當知是師與衆有異言(4)
有異者是慕闍拂多誕等於其身心常生慈善柔濡別識安泰和同如是記驗即是十二相樹初萌顯現於其樹上每常開敷无上寶花既開已輝光普照一一花間化佛无量展轉相生化无量身若電那勿内懷第一大王樹者當知是師有五記驗一者不樂久住一處如王

自在亦不常住一處時有出遊將諸兵衆嚴持器仗種種具備能令一切惡獸怨敵悉皆潛伏二者不慳所至之處若得觀施不私隱用皆納大衆三者貞潔防諸過患自能清淨亦復轉勸餘修學者令使清淨四者於已尊師有智惠者而常親近若有无智樂欲戲論及鬪爭者即皆遠離五者常樂清淨徒衆與共住止所至之處亦不別衆獨寢一室若有此者名爲病人如世病人爲病所惱常樂獨處不願親近眷屬智識不樂衆者亦復如是二智惠者若有持戒電那勿等内懷智性者當知是師有五記驗一者常樂讚歎清淨有智惠人及樂清淨智惠徒衆同會一處心生歡喜常無厭離二者若已智根見解狹劣聞他智者智惠言語心無妬嫉三者諸有業行常當勤學心不懈怠四者常自動學智惠方便諸善威儀亦勸餘人同共修習五者於其禁戒慎懼不犯若悞犯者速即對衆發露陳悔
三常勝者若有清淨電那勿等内懷勝性當知是師有五記驗一者不樂讒詔狼悞如有是人亦不親近二者

不樂鬪諍諠亂若有鬪諍速即遠離強來鬪者而能伏忍三者若論難有退屈者不得承危嘆以稱快四者輒

不漫陳不問而說若有來問思付而荅不令究竟因言被耻五者於他語言隨順不逆亦不强證以成彼過若

於法衆其心和合无有分析四勸喜者若有清淨電那勿等內懷歡喜性者當知是師有五記驗一者於聖教

中所有禁戒威儀進止一一歡喜盡力依持乃至命終心无放捨二者但聖所制年一易衣日一受食勸喜敬

奉不以爲難亦不妄證云是諸聖權設此教虛引經論言通再受求解脫者不例此戒三者但學已宗清淨舌

法亦不求諸恥敗教四者心常卑下於諸同學而无憎上五者若謂處下流不越居上身爲尊首視衆如已愛

無偏黨
五勤修者若有清淨電那勿等內懷勤性當知是師有

五記驗一者不樂睡眠妨修道業二者常樂誦勵心不怠同學教誨加意喜謝亦不因教心生怨恨已常勸

修轉勸餘者三者常樂演說清淨正法四者讚頌禮誦

轉誦抄寫繼念思惟如是等時无有虛度五者所持禁戒堅固不缺

六真實者若有清淨電那勿等內懷真實性者當知是師有五記驗一者所說經法皆悉真實一依聖教不妄

宣示於有說有於无說无二者心意常以真實和同不待外緣因而取則三者所持戒行每常真實若獨若衆

心无有二四者常於已師心懷決定盡力彘事不生疑惑乃至命終更無別意五者於諸同學勸令修習以真實行教導一切

七信心者若有清淨電那勿等內懷信心性者當知是師有五記驗一者信二宗義心淨无疑棄暗從明如聖

所說二者於諸戒律其心決定三者於聖經典不敢增減一句一字四者於正法中所有利益心助歡喜若

見爲魔之所損惱當起慈悲同心憂慮五者不妄宣說他人過惡亦不嫌謗傳言兩舌性常柔濡質直无二

八忍辱者若有清淨電那勿等內懷忍辱性者當知是師有五記驗一者心恒慈善不生忿怒二者常懷歡喜

師有五記驗一者心恒慈善不生忿怒二者常懷歡喜

不起恚心三者於一切處心無怨恨四者心不剛強口无惡惡常以濡語悅可衆心五者若內若外設有諸惡煩惱對值來侵辱者皆能忍受歡喜无怨

九直意者若有清淨電那勿等內懷直意性者當知是師有五記驗一者不爲煩惱之所繫縛常自歡喜清淨直意二者但於法中若大若小所有諮問恭敬領受隨喜善應答三者於諸同學言无反難不護己短而懷嗔恚四者言行相副心恒質直不求他過以成鬪競五者法內兄弟若於聖教心有異者當即遠離不共住止亦不親近共成勢力故惱善衆

十功德者若有清淨電那勿等內懷功德性者當知是師有五記驗一者所出言語不損一切恒以慈心善巧方便能令衆人得皆得歡喜二者心恒清淨不恨他人亦不造憊令他嗔恚口常柔夷離四種過三者於尊於卑不懷妬嫉四者不窶徒衆經論弟子隨所至方清淨住處歡喜住止不擇華好五者常樂教悔一切人民善巧智慧令修正道

十一齊心一等者若有清淨電那勿等內懷齊心性者當知是師有五記驗一者法主慕闍拂多誕等所教智惠善巧方便威儀進止一一依行不敢改換不專已見二者常樂和合與衆同住不願別居各異計三者齊心和合以和合故所得憫施共成功德四者常得聽者恭敬供養愛樂稱讚五者常樂遠離調侮戲笑及以諍論善護內外和合二性

十二內外俱明者若有清淨電那勿等內懷俱明性者當知是師有五記驗一者善拔穢心不令貪慾使已明性常得自在能於女人作虛假想不爲諸色之所留難如鳥高非不殉羅網二者不與聽者偏交厚重亦不固戀諸聽者家將如已舍若見法外俗家損失及愁惱事心不爲憂設獲利益及欣喜事心亦如故三者若行若住若坐若臥不寵宓身求諸細滑衣服臥具飲食湯藥鳥馬車乘以榮其身四者常念命終險難苦楚危厄之日常觀无常及平等王如對目前無時暫捨五者自身柔順不惱兄弟及諸知識不令嗔怒亦不望證令他惡

名常能定心安住淨法如是等者名爲十二明王寶樹
 、、、、、、汝等今者若欲成就無上大明清淨
 菓者皆當莊嚴如是寶樹令得具足何以故汝等善子
 依此樹菓得離四難及諸有身出離生死究竟常勝至
 安樂處尔時會中諸慕闍等聞說是經歡喜踴躍歎未
 曾有……

(イ)電那勿とは殘經六枚右に、應輪經云、若電那
 勿等、身具善法、光明父子及淨法風、皆於身
 中、每常遊止、と云ひ、また同處に寧萬經云、
 若電那勿、具善法者、清淨・光明・大力・智慧・
 皆備在身、と記せり則ち所謂善法を具するも
 のにして、既に大聖の境に達したる人なるべ
 し、今此語の原形を知らず。

○字傍に點を付したるは、本文中に引用せるも
 の、若くは從來摩尼教に關して知られたる事
 柄と對比すべき要項と思惟せるものなり。

以上は殘經中の一節の抄出にすぎざれども、之に

よりに新たに此宗教に就いて知り得べき所決して少
 々に非るべし。

三、經中に見ゆる特種の語に就いて
 余輩は茲に此經中に見え、且つ從來摩尼教に關す
 る學者の論議中に屢々討究せられし特種の語を摘出
 して三個を得たり、則ち一、二宗義、二、慕闍、三
 拂多誕是れなり、今少しく此等の語に就いて論述す
 る所あるべし。

前掲經中(ハ)に、「信二宗義、心淨無疑、棄暗從明、
 如聖所說」と云ひ又た殘經七枚左に五種の無上清淨
 光明寶樹中の意樹なるものを説きて、「(其樹)莖是了
 二宗義」と云へり、抑も二宗なる文字が支那に行は
 れし宗教に關して用ゐられたるは、佛祖統記の記事
 第三十九、を以て最も古しとすべし、即ち「波斯國人
 拂多誕西海大秦國人持二宗經僞教來朝」と記し、以て武后
 延載元年の事なりとす、而して良渚之に註して、「二
 宗者、謂男女不嫁娶、互持不語、病不服藥、死則裸

葬等云々」と云へり。されど此註記によりては、何が故に拂多誕の齋らしし宗教を二宗教といふやは明らかならざるなり。されば碩學シヤヴヌ氏の如きも、此文字を譯して *deux vénérables* と云ひ、また *deux aînées* とも解し得べしと説けり。(Chavannes: *Le nestorianisme et l'inscription de Karir-Balgassoun. Journal Asiatique. 1897.*) されど此字義に就いては、宋の洪邁風く之を説きて、二宗とは明暗の二者を指せるものなりとせること、彼のペイオ氏の論述せるが如し。(Bulletin de l'École Française. 1933.) 只だ茲に注意すべきは、二宗の字が明暗二元の宗教を指せるものなるべきは疑なしとするも、然も其の教義に於て此兩者を標榜して立てるものは、必ずしも一宗教のみに限らざること之れなり、即ち摩尼教にも是を説くと同時に、彼のゾロアスター教 (*Mazdeisme*) 即ち唐に祇教と稱するものも、亦た同様に此の二者を説けり、もし文字の上に表はれたる意味のみ

を以てすれば、果して其の何れを指したるものなるかに就いては、蓋し疑なき能はず、彼のドベリア氏が二宗の文字を以て正しく *Dualism* と解しながら、然も尚ほ此の語が祇、摩尼の何れを云へるかに關しては少からざる考慮を費せるは、(Devéria: *Muslimans et Manichéens Chinois. J. A. 1897.*) 決して理由なきに非ず、吾人は佛祖統記の記事のみに據りても若し審らかに之を論究すれば、祇教は蘇魯支ゾロアスターの教にして、所謂摩尼教(末尼教)とは區別すべきものなるを知り得べく、従がつてドベリア氏の如く摩尼教徒が又た祇教をも信じたりとは考ふるものに非ざれども、然も佛祖統記の「末尼火祇者、初波斯國、有蘇魯支、行火祇教、弟子來化中國、唐正觀五年、其徒穆護何祿、詣闕進祇教、勅建大秦寺○武后正載元年、波斯國拂多誕、持二宗經偽教來朝」の記事は、既に「末尼火祇者」の句に於て甚だ曖昧にして、假令蘇魯支ゾロアスターの教が祇教にして、穆護マユキ(何祿)が之を唐に齎

せしことについては明らかなりとするも、然も拂多誕の持ち來りし二宗教が、必らずしもマニ教なりとの絶對的の證明と爲すには足らず、其間には尙ほ他の資料によりて之を斷定すべき餘地の存せざるに非るなり。而して今吾人は上記殘經中の句によりて、此欠陥は充分補はれたるものと信ぜんとす、之れ此

のマニ教經典中に、自から其宗教を呼んで二宗教となし、また佛祖統記に二宗教を持ち來れる人として記せる拂多誕の名も、前記(ロ)及び(ニ)に於るが如く明記せらるゝを以てなり。而して同様に明暗の二者を標榜して立てる二元教を稱するに、何が故に其一方をのみ二宗教の名によりて呼ぶに至りしかに就いては更に此二教各自の教義に就いて之を考へざる可らず。蓋し兩者共に二元論的宗教なるに於ては同一なるが如きも、然もゾロアスター教にては、明神が終に暗魔を克服して、終に光明の一根に歸せしむるを要義とするに反し、マニ教にては全然兩者の歸一を

認めず、終始明暗兩者の分離を説くものにして、彼のペイオ氏發見の摩尼教殘卷にも、過去現在未來の三際を通じて、兩者懸隔の旨を説けり、即ち前者は二元的とするも、其間大に一元の性質を有するものと云ふべく、是れ特にマニ教に對して二宗教の名を用ゐたる所以に外ならざるべし。

次に考がふ可きは慕闇なる文字なり、佛のシャブンヌ氏は、曾て前記「ネストル教とカラバルガッソンの碑文」なる長篇を公やけにして、多くの史料を蒐めて以て支那に所謂摩尼教のことを説き、又た之れに關連して彼の回紇民族の遺物として有名なる、漠北オルコン河畔のカラバルガッソンの碑文中に見ゆる、「慕闇」なる名に就いても説明を試みたり、而して摩尼なる語を以て、Mani 若くは Manichaeism と見るは只だ之れ音聲の類似に依頼せる極めて漠然たる比定にして、何等根據の存するものに非ずとし、反りて之れを以てイスラミズムを稱せるものなりと云

ひ、従がつて摩尼と縁故淺からざる回紇人は、唐代よりマホメット教の信徒なりしを説き、碑文に回紇に入りし新宗教徒として、「慕闐徒衆」とあるは、イスラム教徒と解釋すべきものなるを説きたり、之れ實に前人の會て思ひ至らざりし所にして、此説にして若し成立するものとせば、マニ教なるもの、東方に傳播せし事實は、根本的に覆さるべかりしなり、されど此の如きはもとより氏の一時の謬見にして、二三の支那史料に給かれたると、及びその誤解にすぎず、同年早くもドベリア氏は「支那のマホメット教及びマニ教」と題して、ほと同一の史料によりて摩尼教の Manichaeism なるを論證し、翌年にはマルクアルト氏又た更に回紇碑文に關して論述し、(Marguarth: Historischen Glossen zu den alttürkischen Inschriften: Wiener Zeitschrift. f. d. K. des Morgenl. Vol. XII.) 其後ヘイオ氏また之れに關する考を發表して、(前出)今や摩尼教が Manichaeism にして、回紇碑文に

新たに其の國に入りしことを記せる新宗教も、亦た此宗教なることは一般に疑を存せざる所なりとす、されど由來唐代に於る所謂三夷の教は、等しく西方波斯、大秦の地方より輸入せられ、而して之れに關する記録は極めて乏しく、また曖昧なること、彼の佛祖統記、僧史略の如きにすぎざれば、屢々疑義の此間に挿まるゝものあり、而して諸學者の回紇碑文に關する解釋も、未だ必ずしも絶對的確證を與へたるものとは爲す可らざる點あり、今先づ順序として先人の間に慕闐なる名に就いて攷究せられたる次第を略述すべし。太平寰宇記百八十六卷吐火羅國の條下に曰く、

開元七年、其葉護支汗那帝賒上表、献天文人^{大慕闐}、試加試驗、
と、又た冊府元龜九百七十一卷に曰く

(開元七年六月)吐火羅國支汗那王、帝賒上表、
献解天文人^{大慕闐}、其人智慧幽深、問無不知、

伏乞天恩喚取慕闍、親問臣等事意及諸教法、知其人如此之藝能、望請令其供奉、並置一法堂、依本教供養、

と、又た同書九百九十七卷にも、殆んど同様の記事ありて、只だ二三字の相違と、其の最後に「其長男吉獵顛」の五字を附加せり、此等兩書の記事はもとより同一事項にして、冊府元龜によりて前者の盡さざる所を知り得べきなるが、更に之れと關連して考ふ可きは舊卷書百九十八卷蒲林國の條下に

開元七年正月、其主(蘇林國)遣吐火羅大首領、獻獅子・羚羊各二、不數月、又遣大德僧來朝貢、

とあるもの之れなり。大慕闍の來れるは開元七年六月にして吐火羅の人なり、而して舊唐書には、同年正月蒲林國より吐火羅の大首領を遣はして朝貢し、其後數月ならずして又た大德僧を遣はせりといふより、此大德僧なるものも亦吐火羅の人にして、即ち冊府元龜等に見ゆる慕闍なるべしとは、早く Gaubhi

氏の考がへたる所にして、其の後フィリップ (Phillip) 氏の如きは熱心に之を論證せんとし (China Review Vol. 7, p. 415) たり、此の比定は他に之れを否むべき史料の存せざる限り、時と場所との條件よりすれば、ほゞ之を許容すべきものなること、多くの人の認むる所なるべく、只だ之に對する非難は正月に蒲林より遣はしたる使節が、吐火羅の人なりしを以て、其後數月ならずして蒲林の貢使として至れる大德僧も、亦た之を吐火羅の大德僧と見得べきや否やとの一點にあるべし、而して此點に顧慮すべきに拘はらず、敢て此説を首張する人々の考を求むる時は、蓋し又た其間に大なる理由の存するものなるを知るべし、即ち此比定を根據として、當時キリスト教の東傳、殊に回紇にキリスト教の入りしを證せんとするものにして、慕闍が當時蒲林國よりの使として遣はされたるものならば、彼は勿論其國教なるキリスト教の德僧ならざるべからず、従つて八世紀半頃の出

來事として回紇碑文に新宗教の輸入を説きて「四僧入國、闡揚二祀。洞徹三際、々々、羣闡徒衆、東西循環、往來教化、云々」と云へるものは、此國にタリスト教の傳播せられたるを記せるものなりと解かんとするものなり。此碑文の解釋に於て有名なるシェンーゲル (Saligne) 氏の如きも、亦此考を抱ける人なりとす。されど由來條件の具備せざる比定は往々にして恐るべき誤解を生ずるものあり、此等の説によりて、一時回紇民族がタリストル教徒なりしかの如く思はれたりし後、彼のドベリア、マルタルト、ペイオ氏等は、其新宗教なるもの、タリスト教に非ずしてマニ教なるを説きしが、其論據とせる所は實に唐書以下の史籍に、マニ教が回紇に入りしを記せること、又た其の教義を以て碑文に見ゆる二祀、三際等の文字を説き、二祀は彼の明暗の兩者を説ける二宗にして、三際は過去、現在、未來の三者をいへるものなりとせるものなりしなり。此考はもとより正

當のものにして彼のシェンーゲル氏が二祀を以て *Zwei Sacramente* 三際を以て *drei Beschränkung* と曲解せるは (*Die Chinesische Inschrift auf dem nigrosolen Denkmal in Kara-Balgassun. 1896*) 茲に明らかに説破せられたりと雖、然も碑文に記さるゝ羣闡なる名に就いては、其後新たなる史料の提供せられたるを知らず、殊に二祀、三際の語を、ペイオ氏の説けるが如く明暗の二者、過、現、未の三際と説くとするも、然も尙ほ明暗は祇教に於ても之を稱へしものにして、其當時未だ之を以て絶對的にマニ教と見る可きには非りしと共に、三際の如き語はもとよりマニ教に限りて用ふべきものに非ず、佛敎にも之を用ゐ、又た近く同氏によりて發見せられたる景敎經典の目録中にも、三際經なる名を認むるに非ずや、(敦煌石室遺書景敎三威蒙度讀參照) 回紇に祇敎の入りし證なければ、二祀を以て祇敎と見る可らざるは明らかなりといはんも、然らば多くの學者は何の憑

る所ありて彼のキリストル教の回紇傳播説を稱へしや、之れが證左は一も記録の上に存するものあらざるにも係はらず、危険なる比定を基礎として碑文の墓闌の二字に所縁を求めしものに過ぎざるに非らずや、若し附會の説を敢てせしむれば、二祀三際等の文字を始め、碑文の記事は、曾て二三の學者の見たるが如く、之れを佛教とも見得ざるにあらず、また祇教とも説明し得られざるにも非らざり、然も此の如きは既に今日に於ては説く可らず、之れ即ち此殘經によりて從來學者の依據せし二祀、三際等の語の以外に、新たに墓闌なる語より此碑文に云へる宗教の何なるやを指定し得べきを以てなり。前出口に「墓闌、佛多誕等、於其身心、常生慈善、云々」と云ひ、(二)に「法主墓闌佛多誕等所教智慧善巧方便威儀進止云々」と云ひ、又たホに「余時會中諸墓闌等」、其他殘經十三枚右に「時墓闌等」、十三枚左に「諸墓闌等」と記せるを見る、是れに依れば墓闌なる名は明

らかにマニ教徒を云へるものなること、一點の疑を容れずといふべし、されば吾人は茲に初めて彼の太平寰宇記、冊府元龜に見ゆる大墓闌のことは、吐火羅國よりマニ教を唐に輸入し、其の傳播を計りたるものなるを知るべく、従がつてフィリップ氏等が冊府元龜と舊唐書との開元七年の條を比定同一視せんとせしことは、クリスト教の東傳を稱へんが爲に、比定の條件に對して盲目なりしことを證して餘りなかるべく、又た回紇碑の記事が、疑もなくマニ教の輸入を記せるものなるを證して餘す所なきを得べし。もとより此の如きは殘經中の墓闌なる字と、以上の諸書及び碑文に見ゆる墓闌なる字とが、同一語を寫せりとの假定の下に行はるべき議論に外ならず、而して特に此假定の可能を論ずるの要は茲に存せざるべし。

たゞ尙ほ考へざる可らざるは、墓闌がマニ教徒を表はす語なるに於ては疑ふ所なしと雖、然かも廣く

其の教徒を指せる語と見る可きや否やにあり、慕闍
或は大慕闍を以て人名と見たる學者の説の誤まれる
は、殘經を一讀すれば明らかにして、茲に之を説く
の要なかるべし、思ふに此の語マニ教徒を稱するも
のとするも、特に其の僧侶の一階級か、或は僧侶其
の物と呼べるものなるべし、是れ冊府元龜に大慕闍
を遣はして之れに諸教法を問はんことを請ひ、且つ
此人を供奉せしめて以て其の宗教即ちマニ教を傳播
せんと試みたるものなるを記するより考がふれば、
もとより慕闍なるものが其の宗教の僧侶なるを知る
べく、而して經に諸慕闍と云ふよりして考がふれば
此の語に僧侶の意あるを推すに難からざるべし、然
も果して之れが如何なる語を寫せるものなるかに就
いては、今明らかに知る所なし、マニ教僧侶の階級
に就いては、東方の史料、即ち新疆發見の史料によ
れば、*dinar*、*M(a) Vistak*、等の名のありしことは知
り得れど、未だ慕闍に相當するものを見ず、西方の

史料によれば、其の長老を *Majores* と云へりとし、
(Baur: *Das Manichäische Religionssystem* s. 237. ;
Fügel: s. 270.) 更に一般に其の僧侶を呼びて *Muso-*
hanmasān と云へりとし、(*Fügel*. s. 224.) されど何れ
も未だ充分なる緣故を索むるに足らざるべし。而し
てかの慕闍拂多誕、法主慕闍拂多誕と經に記せるも
のに就いても、亦一考せざる可らず。

抑も此の殘經一篇は支那に於て撰述せられたるも
のに非ずして、必らず翻譯せられたるものなるべき
は、人の否まざる所なるべし、此翻譯の經中に於て、
彼の武后の延載元年に、唐にマニ教經典を齎らしし
人の名として擧げられたる拂多誕なる文字を、二箇
所に及びて迄も認むるを得ることによりて、吾人は
次の三條件を規定し得べし、即ち一は此經は拂多誕
の本國なる波斯に於て選定せられたるものなるこ
と、二は此經は拂多誕が其本國に在りし時代、即ち
延載元年(西紀六九四)より少しく以前に當る或年よ

も以後に著はされたるものなること、三は拂多誕は既に其の本國波斯にて、マニ教の法主なりしこと是れなり、而して此の如きはもとより拂多誕を以て、從來學者の見たるが如く人名と解釋するによりて生ずべき結果なりとす、若し拂多誕が人名に非ずして或はマニ教僧侶の一階級の名稱の如きに比定し得べくんば、如上の見解はもとより成立し得べきに非ず、而して此の如き比定は必らずしも試み得られざるに非るべし、由來支那に於て人名の如く記さるゝ外國人の名の如きは、屢々其官職の名にすぎざるものあり、「波斯國人拂多誕」と佛祖統記に見ゆるものは、一見人名としてより解釋の餘地なきが如くなれども、余輩は此殘經に偶々同様の名を認むることよりして、或は之れも人名ならざる或語の音譯に過ぎざるなきかを疑がふものなり、今之を論證するに足るべき史料を有せざるを以て、暫らく以て人名と見るの見解に従がふ。

以上余は此の波斯教殘經なるものが、マニ教經典の殘卷にして、暗黒なる東方マニ教義の研究に對して、一大寶典なるを説き、更に其の中の特種の語二三に就いて管見を施し、以て從來の學者の論議、殊に回紇碑文に見ゆる文字に關して、聊か補説する所ありたり、されど此の如きは此の殘卷の研究に於てはもとより第一歩に屬す、其の教義、其の言語、(經中にはシリヤ系の言葉と思はるゝものにして、マニ教の用語となれるもの諸所に存す)等を始め、精細なる研究に至りては、今考がへ得たるもの二三も悉く省略して更に他日の發表を期せり。只だ之れを以て聊か此の珍籍に對する世の注意を喚起するを得ば幸甚しとなす。(完)

(三月二十一日稿)